

# くじら日記

太地町立博物館から

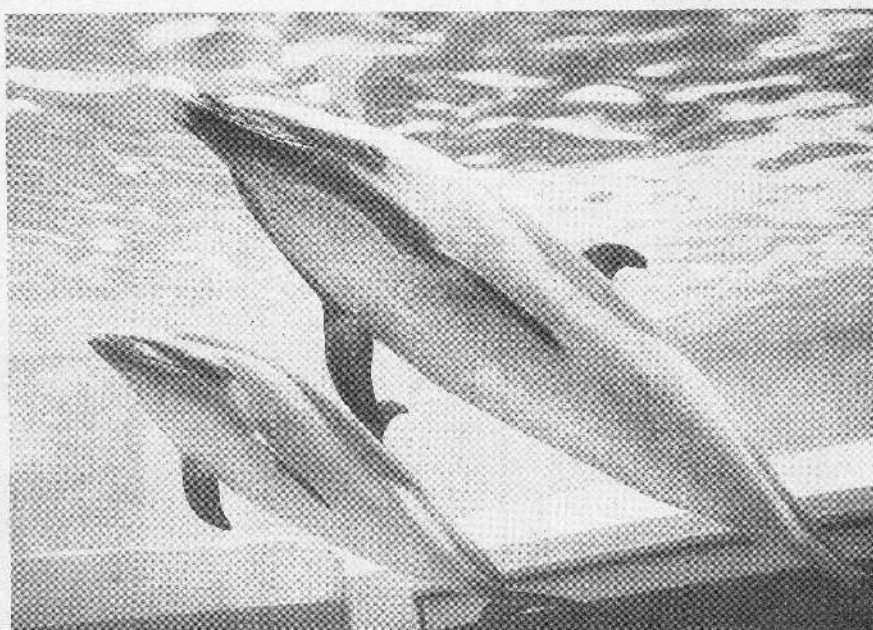


昨年7月25日午前0時26分、太地町立くじらの博物館の飼育史上、最も小さいイルカが誕生しました。マダライルカの雌の赤ちゃんで、体長85センチ、体重8キロというぬいぐるみほどの大きさです。この種は、当館が飼育する9種の小型鯨類の中でも小さいほうで、大きくなっても最大で体長260センチです。

マダライルカの繁殖事例は極めて少なく、当館では初めてのことで。本種の最大の特徴は、種名の由来にもなっている体表の斑点模様です。濃い灰色の背中側には明色、薄い灰色の腹側には暗色の斑点がそれぞれ広がり、まだらに見えます。しかし、赤ちゃんにはその模様が見当たりません。実はこの斑点は加齢すると出現し、増加するのです。

12月1日、当館の海洋水族館マリナリウム大水槽で赤ちゃんの一般公開を始めました。母親「ラナ」のおっぱい

## マダライルカの赤ちゃん誕生



太地町立くじらの博物館で泳ぐマダライルカの赤ちゃん「マナ」(左)と母親「ラナ」

を飲み、ラナと手をつなぐかのように胸びれを触れ合ったり泳ぐなど好奇心の赴くままに遊びました。ときには遊びが度を越したのかラナに叱られる場面もありました。

当館は赤ちゃんの名前の愛称をハワイ語でつけてもらおうと一般公開の現場で投票箱を設置し、郵送を含めて公募しました。この種は比較的暖かい海域を好むため、熱帯の

ハワイの言葉にしました。全国各地の484人から95種類の候補が寄せられました。その中から、16人が応募したハワイ語の「マナ」を飼育員は選びました。「奇跡的な力」という意味であり、「希望」を指す「マナオラナ」にもつながります。

さらにいうと「マナ」には、飼育員の「思い」も込められています。母親のラナは2014(平成26)年、海に生きる野生の

状態から当館にやってきました。マダライルカは神経質で、飼育環境に慣れるまでに時間がかかります。ラナも例外ではなく、しばらくしてストレスのためか流産したことがあり。それ以来、血液検査で妊娠の可能性が判明しても、期待通りにはいきま

ませんでした。「もしかしてラナは繁殖できないかもしれない」という不安が飼育員の間に広がりました。

諦めかけた妊娠と出産でしたが、9年の歳月を経て、ついにマナの誕生に至ったので

す。「奇跡的な力」や「希望」という意味合いの愛称には、奇跡的な新しい命の誕生を祝い、母子が幸せでいてほしいという飼育員の希望が込められているのです。

今年1月25日で誕生から半年がたちました。マナは体長135センチ、体重30キログラムに成長。誕生からの日数は、国内のマダライルカの繁殖個体飼育の最長記録を更新中です。ただ「順風満帆」というわけには

いかず、おっぱいばかり飲むので魚を食べる練習をさせたり、危なっかしい行動にハラハラしたり、飼育員は振り回されっぱなしです。でも、そんな苦労や不安もマナがいるからこそ。マナ、「Happy Half Birthday! (半年の誕生日おめでとう)」。

(太地町立くじらの博物館館長 稲森大樹)

# 繁殖飼育の最長記録更新

原則、第1日曜日に掲載します。